



「湯花トンネル (いのはな)」を通過する中央線特急列車  
平成 17 年 8 月 11 日 東京新聞掲載記

## ◇散歩のみどころ

今回の散歩は、旧甲州街道を小仏峠山麓バス停終点から少し登った寶珠寺からJR高尾駅までの約6kmの道程である。

お寺をお参りした後、都文化財のカゴノキや不動の滝を見学、明治天皇がお駕籠で登った場所から摺差の常林寺へと歩く。紅葉の里、蛇滝道入り口清明園浅川老人ホーム庭に安置されている芭蕉の俳句を詠み、隣の千代田稲荷神社へ。ここは隠れた有名スポット。圏央道を仰ぎ見、富士講招きの旅籠から米軍機による列車空襲の惨劇を伝える慰霊碑へ。お参りをして更に旧道を下る。都内最後だった上長房分校から高尾梅郷を迂回し、一里塚から小仏関所跡へ。市内ここだけの「めぐり地蔵」は見どころ。念珠坂、首地藏跡を通り、平成二十四年四月開園の「高尾駒木野庭園」でのんびりと過ごし、近道を通り高尾駅へ。

## ●小仏・地名の由来

新編武蔵風土記稿には、甲州街道の小仏について「小像の石地藏あり、故に名とするならん。或はいう。この地の大日堂本尊、元の像は土中出現せるものにて小像なりしかばこの地名は起こりしと」とある。

藤原兼次郎氏の「日本の地名」などでは、峠は武蔵国と相模国の国境を形成することもある。両国の境界に變動が起こらないよう平和を念じての名称と説明されている。

また、奈良の大仏に対して関東の小仏という民話も伝えられている。小仏という地名はここだけのものではない。上恩方町の陣馬山麓にもあり、山梨県上野原町の柄原地区にもある（上野原町誌）。何れも里人しか知らぬ小地名で、仏像には関係なさそうである。

崖の古語は「ホキ」という。広辞林に「崖、山腹の険しい所、歩危」とある。この歩危が、徳島県山城町の大歩危（おおほけ）小歩危（こほけ）

のボケとなり、ホッケ（京都府）ボッケ（千葉県）となる。小さな崖が小ボケで、小ボッケがコボトケになったと見てよいであろう。小仏は小歩危と同じ意味の地名といわれている。

現在、小仏峠の頂上には明治天皇聖蹟碑や太政大臣、三条実美の歌碑が建っている。明治十三年（一八八〇）山梨巡幸の際、明治天皇の通行を記念して建てられたもの。

歌碑の和歌は、三条実美が高尾山薬王院に詣でて詠んだものといわれている。

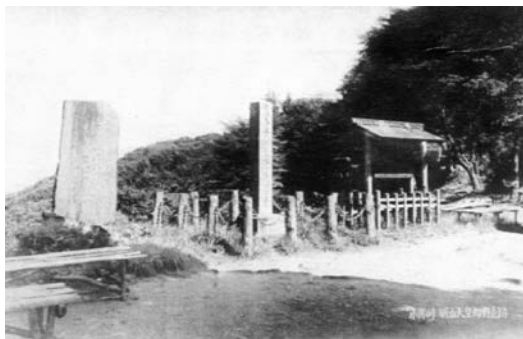
「来てみればこかひはた織るいとまなし甲斐のたび路の野のべやまのべ」



小仏峠明治天皇御小休所跡



小仏峠庚申塔と地藏様



小仏峠明治天皇御野立跡  
中央：聖跡碑 左：三条実美歌碑

## ●小仏峠・名物茶屋

『小仏峠は、八王子市裏高尾町の山頂にあり、昔の甲州街道の要衝である。峠への道は「緑の回廊」だ。のどかな村を抜けて山に分け入り、沢の流れに沿い、時に急坂を上って約一時間、風走る小仏峠に着く。標高五六〇m。見渡せば山塊がはるか彼方に連なり、太陽がまぶしい。

その峠の名物だった青木茶屋が、営業を停止したのは平成十四年三月十二日。主人の青木民雄さんが亡くなったためだ。

「前日まで山に登って荷揚げをしていたんですよ。それが急に……。八十歳でした。私も年だしもう荷運びもできない。茶屋はもう休むしかないですねえ」（妻のダイさんの追想）

ダイさんは昭和二十四年（一九四九）に民雄さんと結婚した。本家から茶屋を譲り受け、以来二人で荷を運び、登山客を慰め、峠とともに生きてきた。半世紀の峠通いは夫婦にとって、まさに人生そのものだった

ろう。隣の茶屋もやはり主人が亡くなり休止中という。主なき二軒の茶屋は、風雨に朽ち、今では廃屋に似て、もの悲しい。

かつて江戸の絵師広重も「茶屋にて休む。中食一ぜん飯、あぶらげにふき。甚だまずし」と記した峠の茶屋。江戸の名残は今、惜しまれつつ一つの歴史を終えようとしている。

旧甲州街道の難所だった小仏峠。路傍のお地藏さんは江戸以来幾万の旅人を見守り続けたことだろう。峠の茶屋も閉じられ、かつてのにぎわいはない。』

「東京新聞 江戸伝説より抜粋」



青木茶屋跡

# ①小仏山寶珠寺 都

裏高尾町一七八五

宗派 臨済宗南禅寺派、山田広園寺

末寺、元天台宗

本尊 釈迦如来

寺宝 小仏のカゴノキ 都

開山 道明上人、

中興・華翁天闇和尚

開創 中興・永享元年（一四二九）

旧甲州街道小仏宿西端の山中に、

天台宗寺院として創建。

応永元年中興、臨済宗となる。

室町末期までは景信山の麓にあっ

たが、再三の野火により焼失、現在の

の地に移転された。

釈迦如来が小さな如来様であつた

ことから「小仏」の地名がつけられ

たともいわれている。

境内には不動明王坐像を祀る不動

堂のほか、旧甲州街道中であること

から、江戸甲府三度飛脚常夜灯、馬

頭観音石碑、それに不動の滝がある。



釈迦如来



寶珠寺



カゴノキ（鹿子の木）

## ●小仏のカゴノキ 都

寶珠寺境内入口にある。

昭和三十七年三月三十一日に東京都の天然記念物に指定。

主幹は枯れているが、その周囲を枝幹が取り巻き一株になっている。

目通り幹囲は約四m、高さは約二十

三m、樹幹を中心に南北約二二m、

東西約一七mある。

関東地方における大樹である。



不動の滝



寶珠寺 馬頭観音



寶珠寺 三度飛脚常夜灯



明治天皇御小休所碑

② 明治天皇小仏峠越え  
 旧甲州街道小仏のバス停終点から少し下った左側、民家の石垣の上に横五十cm、高さ三十cm程の石が置かれている。  
 明治十三年（一八八〇）山梨巡幸の折、天皇は谷合弥七宅で一泊した後、小仏山麓までお車で行き、そこから御駕籠に乗り峠まで登っている。天皇は、担ぎ手の苦勞を察し殆ど歩いて登られたといわれている。天皇が御駕籠に乗り換えた場所の石碑だが、ややもすると見過ごしてしまう。

③ 白雲山常林寺  
 裏高尾町一二二三  
 宗派 曹洞宗  
 本尊 釈迦牟尼仏  
 開山 高乗寺四世空山印大和尚  
 初沢町にある高乗寺の末寺。八王子市史によると、天文八年（一五三九）に高乗寺宗印の記録があり、古い寺であることがわかる。  
 寺を興したのは峰尾氏といわれ、祖先は、栃木県小山の出で、室町時代足利勢に攻められ落城した時、家臣がここに移り住んだといわれている。



常林寺

## ● するさし

新井を過ぎると摺差の集落だ。  
摺差と書いてスルサシと読む。

「多摩地名語源考」によるとスリサシともいい、スリサシが転じたのではないかと。

この集落には昔の面影を残す家が僅かに残る。小仏宿や駒木野宿が宿場として栄えたのに対し、摺差は新井集落と共に農業や林業で生計を立てていたという。

スリは焼畑  
休耕地で、  
サシは焼畑、  
僅かな耕地  
を無駄なく  
利用してい  
たことが伺  
える。



現在のするさし

## ④ 芭蕉の句碑・清明園

「ひばりより 上にやすらう 峠哉」

芭蕉の句碑が裏高尾町、清明園浅川老人ホームの敷地内に建てられている。一m足らずの句碑である。

以前は小仏峠の頂上に置かれていた。何時、誰が建てたかは不明。現在の場所に移動したのは、愛好家と地元の関係者だという。

そもそもこの句は、彼が四十五、六歳のころ大和国、今の奈良県から吉野に行く途中にある「臍（ほぞ）峠」で詠んだ句だという。

芭蕉の名句を刻んだ句碑のうち、詠んだ場所が今の八王子かどうか特定できず、また建てた理由も刻まぬ句碑が市内に幾つかある。

その一つが下恩方町辺名（へんな）の義経千本桜のうちの一本だという木の脇にある。その句碑には、  
「しばらくは 花の上なるつき夜哉」と彫られている

江東区亀戸天神境内にも同句碑が

ある。理由も記され整然と建っている。それには、貞享四年（一六八七）十月吉野紀行の旅に出た芭蕉が、翌年春、吉野の満開の桜とその上に浮かぶ月を詠んだ句だという。

真覚寺境内の小高い丘の上にもある、万葉歌碑も例外ではない。建てる理由を正確に明記すべきで、訪れた人々がこれを詠んで、当地のことと思いを伝える危険があるからだ。芭蕉は、三度小仏峠を通っている。一度目は自分の庵が類焼、甲斐への途次。二度目は江戸への帰路。三度目は故郷伊賀上野から江戸への帰路。



芭蕉句碑

## ⑤千代田神社（稲荷）

裏高尾町

裏高尾の旧甲州街道から、蛇滝、登山道入り口へと折れて、百m程行くと、右側に千代田神社（稲荷）の小さな鳥居が見える。階段を上った所の小さな祠が千代田神社である。「千代田稲荷大神略縁起」によると当神社は、太田道灌が千代田城（現在の皇居）築城に際し守護神として城内に勧請し、後に徳川家康公が江戸城紅葉山に厚く奉ったもの。

明治維新の際、信仰厚い女官（滝山）によって城外に移され、後年、神縁に導かれて紅葉山と称せられる当地に奉還されるに至ったとある。

稲荷大神は伊勢外宮豊受大神と同神にて衣食を司り、商売繁盛、祈願達成の守護神である。千代田稲荷大神は、由緒ある大神でもある。

境内には、日の出弁財天ほか諸神仏がお奉りしてある。この地に祀られた理由は明らかではないが、秋には紅葉が美しい地である。



神 額



千代田神社鳥居



荒澤出世不動明王



千代田稲荷神社

## ⑥富士講まねき

富士講は、享保十八年（一七三三）食行身祿（じきぎようみろく）が富士山へ入定したのをきっかけに、江戸市中を中心に盛んになった。特に江戸から富士山への往路又は帰路に、甲州道中に沿った通り道にある八王子宿に止宿することが多かった。高尾山に詣でた富士講もいたという。また高尾山にも浅間神社があり、必ずお参りしたという。

旧甲州街道の蛇滝口バス停前に、昔をしのぶ講中宿が残っている。戦前まで茶屋を営んでいた峯尾さん宅である。今でも「上行講」などの富士講の石碑が残っている。軒先に「北口（富士吉田口）」などと書かれた富士講の「まねき」がずらりと並んでいる。「はね板」は縦五〇cm、横一五cm。現在も七十五枚が掲げられている。

戦前は、夏になると白装束の富士道者が、ご詠歌を詠いながら甲州街道を歩いている姿が見られたという。

また講中宿の脇には、生活用水の水が未だに湧き出ており、観光客やハイカーの喉を潤している。



観光客や  
ハイカーの喉を潤している湧水



上行講



講中宿（裏高尾）

## ⑦湯の花トンネル

湯の花トンネルは高尾山の北側、旧甲州街道沿いの八王子市裏高尾町にある。JR中央線の線路わきに立つ慰霊碑は、六十人以上の死者を出した、米軍機による列車空襲の惨劇を伝える慰霊碑である。

終戦直前の昭和二十年（一九四五）八月五日。暑い日だった。満員の客を乗せた新宿発長野行きの特急列車は、正午すぎ湯の花（猪の鼻）トンネルに差し掛かった。その時、上空から米軍のP51戦闘機が急降下し、列車目がけて機銃掃射を始めた。当時十三歳で、二歳年上の姉と列車に乗っていた黒柳美恵子さんは、その時の様子を鮮明に覚えている。

「バリバリというごう音が響き、とつさに頭を下げました。米軍機が去り、姉を見ると、うつぶせになったまま。後頭部を撃たれていたのです。逃げようとして立ち上がると、床一面に血が広がっていました」

地元住民が駆け付け、戸板にけが

人を乗せて次々と運んでいった。遺体は近くの民家の庭に並べられた。死者六十人余り、重軽傷者は、二百人を超えた。

事件現場から裏高尾町小下沢の杉林の奥。そこは、銃撃の翌日に大半は身元が分からないまま遺体を焼却した場所である。現在は高尾山登山道の脇に位置するが、その存在に気づく登山者はほとんどいない。

今でも「湯の花トンネル」を特急列車が通過する時、犠牲者を追悼するかのように警笛を鳴らすという。

「資料参考東京新聞ほか」



慰霊の碑



知徳観音



湯の花（猪の鼻）トンネル

## ●最後の軍歌

「思えば今から五十九年前の昭和二十年八月五日の事、私は近所の家の焼跡の片付けを手伝っていました。これは八月二日八王子空襲で、街の九〇%を焼土と化した、その焼跡でした。」

昼食のため家に帰った時、空襲警報が発令されましたが、既に敵戦闘機は頭上に来ていました。私の家の上で戦闘機は急旋回し、バリバリと、もの凄い機銃音を響かせ、高尾方面に飛んで行きました。

それから暫くして負傷者を乗せたトラックが来ました。機銃掃射で怪我をしていたので、手伝ってくれと大きな声で叫んでいました。私達の部落には、中島飛行機の診療所がありました。

私達は筵や藁を運び診療所内の土間に敷き、負傷者を戸板に乗せ、搬送に協力しました。

私が、搬送した人は軍人で確か中尉か少尉でしたが、軍刀を握り大き

な声で軍歌を歌っていました。診療所の土間に降ろした時、医師が重傷者よりも意識の確かな者から診察しろと話していました。

私達が、トラックに戻ると、セーラー服の女学生が一人で歩いて来ました。見ると銃によつて、片腕が吹き飛ばされていました。実に悲惨なものでした。

トラックに着くと、二人の者が既に息絶えていました。私達は別の負傷者を搬送し、筵の上に寝かせました。先に搬送した軍人は、既に息絶えていました。見ると下腹部から腰部に弾が貫通していました。弾が入った処は、小さな傷でしたが、弾が出た処はまるで、石榴を割ったような大きな傷でした。

思えば半月終戦が早ければ、八王子の空襲も、この様な悲惨な事件もなかった事だろうと実に残念です。

冥福を祈る。 南無阿弥陀仏  
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

平成十八年 瀬沼和重



知徳観音由来



知徳観音

## ●慰霊の碑

「終戦間近い昭和二十年（一九四五）八月五日、真夏の太陽が照りつける午後十二時二十分頃、満員の新宿発長野行四一九列車が、いのはなトンネル東入口に差しかった時、米軍戦闘機 P 51 二機または三機の銃撃を受け、五十二名以上の方々が死没し、百三十三名の方々が重傷を負いました。

この空襲は日本最大の列車銃撃といわれています。私もはこの戦争の惨禍を決して忘れることはできません。ここに確認された犠牲者のお名前を書きとどめ、ご遺族とともに心から冥福をお祈り申し上げます。現在の平和の日々をかみしめ戦争を知らない世代へこのことを語り伝えます。

平成四年八月五日、いのはなトンネル列車銃撃遭難者慰霊の会 建立」  
以前の慰霊碑は上り線の処にあったが、危険なため、下り線の土手の処に移した。

## ⑧都内最後の

### 上長房分校

新井バス停の近くに小さな校舎が見える。都内で最後まで残っていた、八王子市裏高尾町浅川小学校上長房分校である。

この学校の前身は古く、明治四年（一八七一）頃、寺子屋から今の学校に変わったという。明治、大正、昭和、平成と激動の中を潜り抜けた百三十四年の歴史を育む学校である。分校で使われていた古い教材の一部は、本校の浅川小学校で保存展示され、分校の近くで発掘された、縄文時代の土器の破片は、分校で保存しているという。平成十八年現在の生徒数は、一年生が六名のみ。この分校も平成十九年三月で廃校となった。分校の土地は、個人の所有であったため返却し、今は児童園として生まれ変わり、近隣の住民に親しまれている。長きにわたって続いた、東京都で最後の分校も、悲喜交々の思い出を残し、消えて行った。



旧 上長房分校（現在は児童園）

## ⑨ 一里塚

江戸時代、主要街道の両脇に塚を築き一里ごとの目安とした。

一つ目は、江戸から八王子宿へ入る入口、八王子十五宿の新町、竹の鼻（今の永福稻荷神社脇）に置かれた。

二つ目は、千人町と並木町の間の旧甲州街道にぶつかる道の辺りという。

また、散田町の中央線立体交差を、抜けた並木町の甲州街道北側辺りという説、檜の太木がある横山事務所説、更に長安寺辺りとする説などがある。

三つ目は、裏高尾町新井に置かれた。旧街道沿いに孟宗竹の小さな竹林がある。この竹林の東側、割烹を営む「思源庵」の場所一帯がそうだという。

ここに、三尺ほどに盛った塚があり、その上に石のような物が置いてあったようだが、今は何も残っていない。そして四つ目が小仏峠である。

## ⑩ 小仏関所跡

裏高尾町

小仏関所跡、旧甲州街道が陰阻な山間部へさしかかる手前に所在する。

当初は武蔵国と相模国の境の要衝として小仏峠の頂上に設けられ、富士見関また富士関とも呼ばれていた。

小田原北条氏の滅亡、天正十八年（一五九〇）後に、関東に入部した徳川家康により、小仏峠の頂上から



孟宗竹の小さな竹林

駒木野の現在地へ移設され整備されたという。

「小仏御関所絵図」等によれば関所には、東門と西門が設けられ、敷地の北側に間口五間奥行三間の番所が設けられていた。東門の外には榎沢川が流れ、駒木野橋（関所橋）が架けられていた。

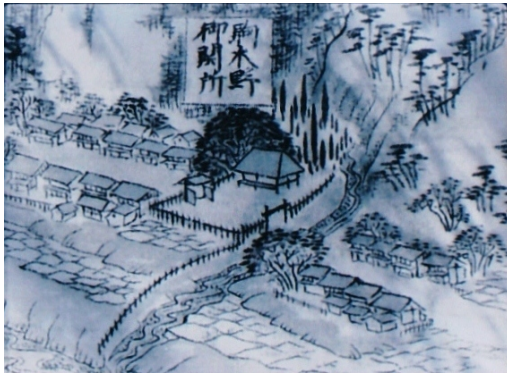
関所の周囲五十七間と対岸に竹矢来が組まれ、川底も深くして通行人の往来を規制していた。

関所の警備は、元和九年（一六二三）以降は四人体制となり幕末まで続いた。

関所は、明治二年（一八六九）の太政官布告により廃止され、建物も取り壊された。今は公園となり、石碑と通行人が手形を載せた「手形石」、手について待った「手付石」が残され、当時の雰囲気伝えている。

英国通訳アーネスト・サトウが、馬で強行突破したのは有名。

「資料参考・東京新聞ほか」



駒関要樞「桑都日記」  
極楽寺蔵



小仏関所

## ●駒木野と歌人・落合直文

裏高尾・駒木野関所跡の公園に「先賢彰徳碑」という碑がある。

これは、ここ駒木野の関守の家に生まれ、幕末・勤皇の志士として奔走した落合直亮（おちあいなおあき）直澄（なおずみ）兄弟の顕彰碑。裏面には、その倒幕運動の足跡と共に、「すがすがし関所の跡の松風にとこしへきくは大人たちのこゑ」という与謝野寛（鉄幹）の歌も刻まれている。

漢文体の碑文の一部には次のようなくだりが見られる。

「国文家落合直文実其養嗣子也」。落合直文といえ、明治前期に国学者・歌人として大きな活躍を見せた文人。新しい時代に短歌の革新を目指し、門下生の与謝野鉄幹、尾上柴舟ら、あるいは正岡子規、佐佐木信綱らの活動の基盤を作った人である。また「青葉繁れる桜井の里のわたりの夕まぐれ…」という戦前の唱歌の作者といえ、分りが早いかもしれない。

その人が落合直亮の養子という。

直文は、伊達藩（仙台）筆頭家老鮎貝盛房（あゆがいもりふさ）の、次男として生まれた。直亮の養子となったのは十四歳のとき。

当時、直亮は神職にあり、平田派の国学者でもあった。このため直文は、十七歳で伊勢の神宮教院に入学するが、それが後の文学活動に大きく影響を及ぼすことになる。

「桜見に明日は連れてと契りおきて子はいねたるを雨降り出でぬ」落合直文の歌は、どこか悲哀感が漂うものが多い。梅郷として知られるようになった裏高尾の旧街道を、明治の歌人の少年時代をしのびながら文学散歩してみるのも、また違った味わいがある。



先賢彰徳碑

## ⑪めぐり地蔵 (宿借り地蔵) さん

旧甲州街道駒木野宿、現在の裏高尾町駒木野には、お地蔵さんが現在でも集落中を巡っている。高さ六十cmぐらいの厨子の中に祭ってある。厨子のうしろには紐があり背負うようになっている。

このお地蔵さんが作られたのは、享保年間（一七一六～一七三六）の頃、駒木野宿に火事があり十戸ぐらいが全焼し、その時に命を失った何人かの供養のためという。また、このお地蔵さんは二百年以上も家から家へと巡り続けている。そのためか、通称「めぐり地蔵さん」と呼ばれている。昔の駒木野宿は五十軒くらいなので、一年くらいで巡ってきたが、現在では百六十軒にもなっている。で、一年を越してしまうという。

集落の人は、みんな元気で安全に生活ができるようにと、このお地蔵さんにお祈りしたそうだが、いつの頃からか、子供の健康や成長を祈る

子育地蔵さんと呼ばれるようになった。

あるおばあさんから聞いた話では、ある日のこと、子供たちが、地蔵さんをあまりいたずらしていたので、そばにいたおじいさんが「バチが当たる」と叱ったら、その夜、おじいさんの夢枕にお地蔵さんがあらわれて、

「私は子供が好きだから、いくらいたずらしても怒りませんよ」と言われたという。

今でも子供の多い家では、半年から一年以上お地蔵さんを預かり置き、毎朝食事や水、季節の果物をお供えする。そして三角形の小さな布団を作って、その家の子供の名前と歳、生年月日を書き、厨子の正面にある格子に糸でつるす。

また厨子の下には、文政七年（一八二四）三月建立 地蔵尊 高木□左エ門大工清助 とある。

このお地蔵さんにお参りするには一度や二度では無理。何処の家を巡っているか分からないからである。

このように旧甲州街道は宿場だけに、様々な歴史が残っている。



駒木野宿借り地蔵

## ⑫念珠坂（年中坂）

新編武蔵風土記稿の上長房の項に出て来る「坂の名」である。「甲州街道のうち駒木野にあり」とある。又、「八王子地名考」には「念珠坂・裏高尾町駒木野と新井の中間地点」とある。

因みに、念珠は植物の合歡（ねむ）の木で、八王子では、ネブタ、三重県南伊勢地方の方言では、ネンズと発音され、相模湖町の鼠坂（ネンザカ）山形県西田川部温海町でも、念珠関（鼠ヶ関）（ネンジュガゼキ）と呼んでいる。広辞苑では、念珠を珠（たま）といい、数珠を一つまざるごとに仏を念ずるところから来ているという。日葡辞書では「ネンジュツマグル」と記されている。

いずれにせよ、当時は、昼でも暗い道で、日の暮れるのも早く、旅人が行き交う時、早々と提灯に火を灯し、念仏の一つも称えたくなるのも解る気がする。



甲州街道念珠坂碑



念珠坂碑と小さなお地藏様ほか

## ⑬首塚地蔵

高尾山に向かって、甲州街道から旧甲州街道を右へ曲り、二百mほど行つた西浅川町に派出所（交番）がある。その東隣りに「首塚地蔵」が、安置されていたという。

この首塚地蔵は、関所破りをし、捕つた人達が、首を刎ねられ埋められた場所だという。実際に処刑されたところは南浅川の川原で、今の甲州街道と中央線が交差する両界橋辺りだという。小塚原や鈴が森の処刑場からすると、ほんの一握りの人数だという。それでも処刑されたことには変わりはない。最近まで、地蔵さんというより四角い石塔のような石が置かれ、そこには季節の花が何時も手向けられていたという。その花は、両界橋近くの「華や旅館」の店から買ったものが多かったという。地元の人が厚く供養していた為、今でも交通事故などは起きていないというが、何も痕跡は残っていない。

## ⑭高尾駒木野庭園

この建物は、現駒木野病院に改組される前身「小林病院」が昭和二年にこの地に開設され、住居兼医院として利用されていたもの。大正年間に築造された平屋の母屋と、昭和初期に増築された二階屋で構成されている本格的な日本建築である。この土地と建物は、平成二十一年三月に



首塚地蔵なのか？



駒木野庭園入口正面

▲建物延べ面積・二百四十一<sup>m</sup><sup>2</sup>  
（約七十三坪）  
▲敷地面積・二千九百<sup>m</sup><sup>2</sup>  
（約八百七十九坪）

八王子に寄贈された。「既存施設を極力残して利用してほしい」という持ち主の意向を受け、建物の外観はそのまま残してトイレなどを改修した。周囲は、枯山水、露地や池泉回遊式の本格的な日本庭園に整備し、平成二十四年四月に「高尾駒木野庭園」として開園した。



池泉回遊式庭園（心字池）



中庭

## ◎参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・八王子地名考
- ・高尾駒木野庭園パンフレット
- ・日本の地名
- ・江戸伝説 東京新聞
- ・多摩地名語源考
- ・千代田稲荷大神略縁起
- ・小仏御関所図絵
- ・八王子市史
- ・八王子事典
- ・高尾駅界限 高尾駅南北自由通路  
促進委員会
- ・八王子と鉄道 八王子市郷土  
資料館
- ・日本史総合図録 山川出版社
- ・八王子寺院めぐり 八王子市  
仏教教会青年部
- ・八王子市郷土資料館資料
- ・昭文社
- ・八王子市地図
- ・八王子市観光マップ
- ・インターネット各ページ

メモ